

長者屋敷遺跡(国史跡 伊勢国府跡)

第 27 次 発掘調査 現地説明会資料

平成 4 年度以降、鈴鹿市が継続して学術調査してきました、市内広瀬町所在の長者屋敷遺跡(一部、国史跡 伊勢国府跡)について、8 月から調査してきました第 27 次調査の概要をご報告いたします。

1 発掘調査の成果

- ・ これまで長者屋敷遺跡で分かっていた道路幅の 2 倍の規模に当たる、幅 24m の古代(奈良時代)の道路跡が、金藪かなやぶに向かって真っ直ぐのびていることが確認された。
- ・ その結果、伊勢国府跡の北側に広がっているとされる約 120 m 四方の区画(方格地割ほうかくちわりという)を含めた、全体の構造が明らかとなってきた。

(1) 道路跡

古代道路の側溝と考えられる、平行した溝 2 条(溝 SD319・溝 SD320)が確認されました。調査区の制約から部分的確認したにとどまりますが、少なくとも 80m 以上にわたって、真っ直ぐにのびている道路があることが明らかとなりました。

長者屋敷遺跡でこれまでに確認されてきた道路幅は約 12m (40 尺)でしたが、今回見つけた道路は 2 倍もの規模があります。ちょうど国府の中心施設とされる政庁跡せいちょうあとから、長者伝説の残る「金藪」に向かってのびていることから、当時のメインストリートであったものと考えられます。

さらに、両溝の間隔は、溝の中央(芯々)間でちょうど 24m あります。古代には土地測量の基準として「尺」を単位として用いることが大宝律令等に定められていますが、平城京跡などの調査事例から当時の一般的な尺は 1 尺が 30 cm 前後(平城京では 29.6 cm など)であったことが知られています。

長者屋敷遺跡のこれまでの調査事例からは 1 尺=29.9 cm 程度であって、概ね古代の尺の基準と一致することが分かってきています。この基準尺を用いると、今回発見された道路跡は $24\text{m} \div 29.9\text{cm} = 80$ 尺ちょうどとなります。また、これまでに見つかっている他の区画のための溝や建物等の遺構も、この尺を基準として設計されていることが明らかとなりました。これらのことから、この広瀬の地に極めて高度な測量・設計技術を用いた遺跡が広がっていることが判明しました。

(2) 推定、土塁（築地塀）跡

実際にその痕跡が見つかったわけではありませんが、隣接する溝に堆積した土砂の状況から、道路側溝と考えられる溝 SD319 の東側と SD320 の西側に土塁ないしは築地塀といった、内部と道路をさえぎる施設があったものと推定できます。具体的には、黒色の埋土（溝などに堆積した土砂のこと）の中に見られる黄色の斑点状の堆積や、小石を含んだ土砂などを、土塁ないしは築地塀が崩れて埋まった痕跡だと考えています。

また、部分的に溝の埋土を掘削したところ、瓦が出土しました。このことから、土塁ないし築地塀は瓦葺きであった可能性も考えられます。ただし、瓦の出土量自体が多くないことから、全てに瓦が葺かれていたとは考えられません。必要な箇所部分的に瓦を葺いたのか、あるいは、長者屋敷遺跡全体でいわれていることなのですが、これらの施設を製作途中で廃棄したものかもしれません。



今回見つかった遺構の模式図（断面）

2 参考；基礎データ（*平成21年11月12日現在）

[遺構]

溝 SD319 確認できた範囲では、長さ 80m 以上、幅 1.5m 程度です（写真 2）。深さは北で 0.1m と浅く、南に向かって 0.6m と深くなります。瓦が少量と奈良時代の土師器杯（碗・皿の類）の破片が 1 点出土しました。

溝 SD320 2 区と 3 区に分かれて確認できました。長さは 2 区で 9m、3 区で 10m ほどあります（写真 1・3）。両者は一連の溝だと考えられることから、総延長 30m 以上あることが確認できます。深さは 0.3~0.6m 程度で、瓦の他に須恵器甕の破片が 1 点出土しました。

溝 SD321 主に 3 区と 1 区で確認しましたが、大部分が調査区外に続いているため、詳細は不明です。長さは 3 区で 45m 前後、1 区で 2.5m あります。両者は一連の溝だと考えられることから、総延長 60m 以上あることが確認できます。深さは北で 0.1m と浅く、南に向かって 0.6m と深くなります。比較的多くの瓦が出土しています（写真 4）。

[遺物]

コンテナケース（54.5×33.6×15.0 cm）に 4 箱分が出土しています。このうち、ほとんどが古代の瓦の破片です。また、溝 SD319 から出土した土師器杯は、小さな破片ですが、溝（道路跡）の埋没した年代を推定する手掛かりとなるため注目されます。その土器は奈良時代中頃の特徴をもったものですので、溝（道路）の年代も奈良時代前後に使われていたと考えられます。

また、溝 SD321 から出土した重圈文と呼ばれる文様の軒丸瓦は（この種の文様は聖武天皇即位後の難波宮の造営に際してはじめて採用されたもの）、聖武天皇（724-749 年在位）との関わりが指摘されている遺物であることから注目されます。

金藪
10~12月清掃
→1月実施予定



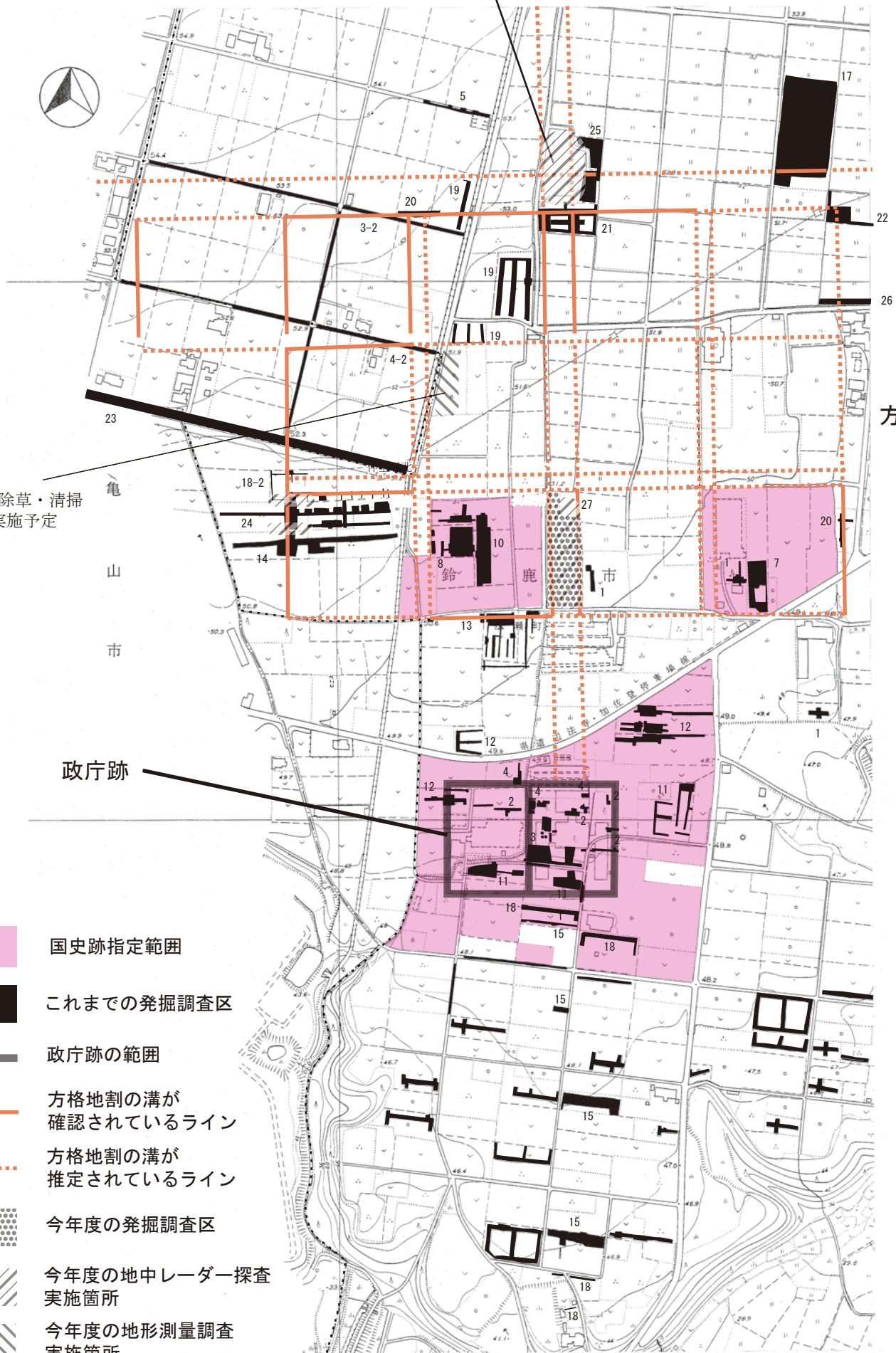
11~12月除草・清掃
→1月実施予定

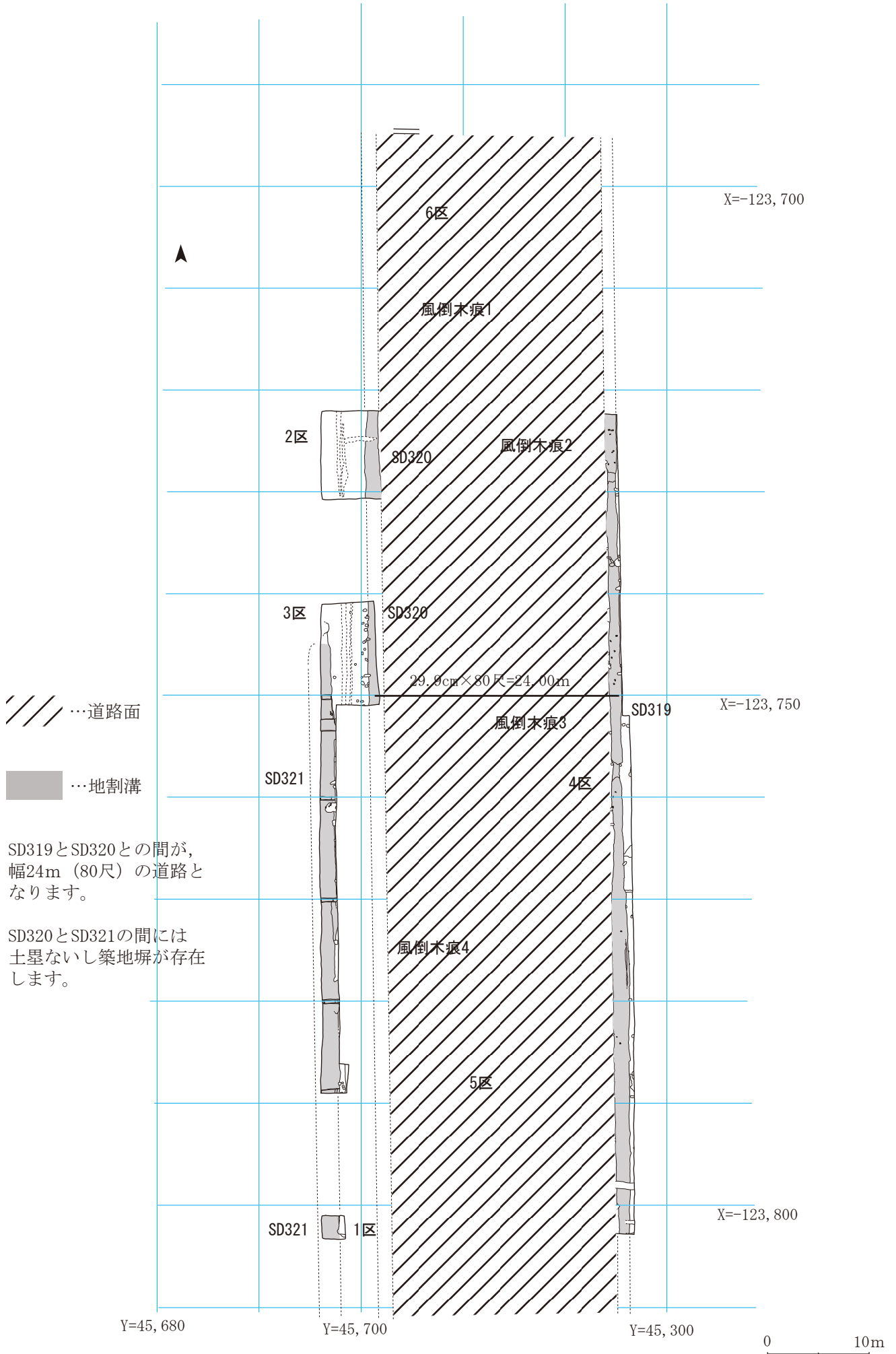
龜
山
市

政庁跡

方格地割

- 国史跡指定範囲
- これまでの発掘調査区
- 政庁跡の範囲
- 方格地割の溝が確認されているライン
- 方格地割の溝が推定されているライン
- 今年度の発掘調査区
- 今年度の地中レーダー探査実施箇所
- 今年度の地形測量調査実施箇所





長者屋敷遺跡第27次発掘調査区 遺構平面図 (S=1:500)



写真1 2区 溝 SD320 検出状況（南から）

調査区の右側の黒色の部分が溝 SD320 です。幅 1.5m 前後の南北方向にのびる溝で、長さが 2 区で 9m, 3 区で 10m 以上あります。おそらく一連の溝と考えられますので、総長 30m 以上はあることが確認できました。さらに調査区の外に続いていくため、全長等は不明です。

4 区の溝 SD319（写真 2）と対となる溝で、この溝 SD320 が 24m 幅の古代道路の西側溝に該当します。

なお、奥に見えている森が通称「金藪」と呼ばれる、長者伝説の残る場所です。



写真2 4区 溝 SD319 検出状況（南から）

中央の黒色の部分が溝 SD319 です。幅 1.5m 前後で、80m 以上にわたって途切れることなく南北のびています。

金藪に向かって真っ直ぐのびていて、ちょうど金藪内部に存在する高まりの東側をかすめるような位置で見つかりました。

2 区の溝 SD320（写真 1）と対となって、古代道路の東側溝に該当します。



瓦出土

写真3 2区 SD320・SD321 検出状況（北から）

調査区の左側の黒色部分が溝 SD320 で、右側が溝 SD321 です（中央の線状の痕跡は、現代の耕作に伴う攪乱です）。両溝とも調査区外へ広がっているため、正確な規模等はわかりません。

なお、これらの溝を部分的に掘削して溝の埋土を観察したところ、両者の間に土塁やあるいは築地塀といった壁状のものがあつたことが推定されました。

なお、矢印部分は瓦が多く出土している地点（写真4）です。



写真4 溝 SD321 出土の瓦（東から）